汲集

七

文
104
三

へ2
719
3

東京帝國大學
駒込町百拾貳番地
坪内雄蔵

へ利10
門
号 ケ19
巻 3

琴後集巻十三

書牘

[illegible]人のもとへ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

明治三十六年十一月五日
坪内雄蔵氏寄贈

へ2
719
3

こゝろもみぢしおけるこゝろ。たゞはまつぶとうけしうたん。

ゆるしうる人のもとひろねと梅のえだをうゑるとて

春雨ふる日夜ふるまでもちてあそばんとてこゝろ

よといひおくるさくらのえだの

はゝをこゝろとりくるこゝろの

ふるうをしてそのかしの猫へうたいとうけしうたんさてうゑ

たまはるまで。小夏のふるこゝろもこゝにはまたかき

あてせのかゝきよはてまた猫へうたいのむすめおかゆゑ

つまおとゝばゝまおとゝ。

をとゝはゝくまうかくきあやうけるあり乃をみよ。

いとゝひまあひくんゆゝきあそひなん。

かゝるをうよこゝろ。老よまそはれなる。義うあやゝのかさ留

をも。とり出ける人ぞ哉。夏よもちかゝる事の侍まて。え

きしかゝめかゝう侍るいあやゝ行るあゝ分を毎よなん。

おもふどちかゝい人となりとよんさうやきよいひうれ世

夏月こゝにをを人のもとへおくるとて

かきくくくくはをふる雨乃ちいてん空もかきれ。吹くれ

ゝるゝよ絵ものかゝうかゝとくくて。これまそはまくくもなく

きめけるをうくくもさくくよりくくその侍るゝ。心帳のをくくよく以

むかきくるかゝのあるををて。いとなるうきすかゝるも侍る

ゝ乳。いゝゝゝのまゝうけるくんといひ侍をいくそをまゝ

きつけやうとおもふ事の〳〵の事にて。都にていうもちやうをはじめて。こゝにあるかしこたちすく〳〵しくこゝのはうもてあそぶ物なれば。まことの京にてもやんごとなきあるやうもあるべし。竹人なるいとゝ〳〵。これよめと云て。いとゝ一つ調しいて。はるゝてしかれといひたゝへる歌。なりあひたる事をもいふかれとおもひ給へ知れまゝ。ろこかてゝそのあるやうなとを。し〳〵はるゝて。いろ〳〵のさいて。かくの糸。名ある事おとらせ給ふつれ共。からしてかくる物し給ふと。あ〳〵よくもあるとゝぬうしへことゝはは給をとだにもれるもあまやせもろの法料ものなり給ふ法師のまゝとの居るまゝいと笑いおくあるてらも。

あやあるまつきぬさしいあるけとも実よりのれいうれかゝ法

六月人のもとより泳をおこせたるよ

法ちさゝきとゝいみたるいとれまつ極もいとまもとばかるまゝ。ゝもしもやんごとれまあるゝやつも給へるなりとそあはさまたまん料まて給とれるふゝとめつゝゝるれんえをふやり給ふるゝ。そろさむきまておかえ給ふつゝくもいめてくつゝへまて給ふてひゝゝゝるのせむのまあてるとしつゝもてきよしゝ給ふもとゝうなんとれとこれたやきのおのもそかゝ給ふとまゝくなるとかくいゝせきるせやのんやまくさるかしゝ給ふゝんも。かゝうくゝるかゝまたなりやとまれかくまれゝちまのあるまゝそよ法ゝふゝ給ふえつゝ愛者れ。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

なるも。狂市のうちよ浸出きん。古人のたのしまるゝ詩ゝ
そのうきうきぬ人ゝよのこゝみやひかゝ珍てん心住のつもり
前ゝよりハどれ　斗まるゝすまるまかゝこゝるまれなふよ
あうて。まるまのあるゝかゆえんまゝぬゝてあるぬかまさいゝ住の
趣のりかひゝよ絶すハ。中ゝよきゝてちきたゝひとやゝひあゝさ
ゝ住ゝ。柳の糸ゝくゝうゝ。てゝてゝまゝとゝえあゝゆゝえまゝ
えやとゝうゝて。ゆめ寓のゆまをあゝとゝ。ゝ陽ひて。

仲芳隣よおゝるまる書

秋の日数ものゝて立ゝ前ゝるるも住りまるゝて。都のちすゆひよ。
いふあゝゝくゝ珍ゝて。四ゝほのみゝゝて。えかゝゝゝ心
ゝとけゝうまゝ。霞霧のゝんおゝきなゝひる住れて。三田姫乃

すれうゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝ住ゝ。ゝゝ。ゝ都のそれゝゆゝ
ゝゝゝやひゝれ住ゝ井よ。ゆて茅よゝゝ珍ゝゝぬまゝ
ゝ。ゝゝ山里。ゝれの古ゝ。住ゝゆゝかゝゝ住ゝかゝ前ゝ。
都人いつれの山乃ゝ住ゝゝ絶ゝゝ。ゝ。ゝ
四ゝ絶ゝ。住ゝ深の出ゝゝゝなゝゝておぼゝゝゝ。ゝのたゝゝ
をゝすれ住ゝて。ゝめゝ。ゝ。四ゝまゝゝゝおゝれ住ゝん
ゝちゝんゝ。ゝ住ゝ。ゝ住ゝ。あゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ
てゝゝゆひゝや。

四ゝ村茶行ゝおのゝうゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ住
ゝて。ゝのゝゝひゝとゝうのむ人ゝなん。ゝのゝ。ゝとゝめゝゝ
ゝゝひゝゝゝゝ

おのれとうつきはけるぬ。さてとうつきかるまたは
はるめれとすれとうねのとのかてきとのかるはゆ
う一殆へや。世人のあるやうとい。吉岡はゆ。のあること
やうしのはんことをとるき。

西村嘉てよまちるみるを

ちりてくし。はる世界のそをとるのるあるあたまよりかど
日ことるいうしまるやしてとてをとうあやるきやし
殆たることそのようもきよおほんはれざるいあとりの夏の。
打ものはえを指のをよりも先ともに殆へるとよかへてをの
玄雨をも。出殆るのこうとやをひのるみとしさるあきたり
志侍と殆へとも志りはてをんなくさめとるるるまる

発せて。是はりるるそいとるりあき。紫の物語六をかへし
殆へるを。ゆるりあくうちしいきはれを。はるしのをそて。
かるるうまのとはるをうんはるるもをうちつきるをはうへこき
かかるういうしひやれはをまるいをりあるはをるはるとを
はるきふそいひしるしぬるはよかを。

あくせあくきりしぶよいるれいまるきるるるをてきん
をてかのあるるきるを。西つるひよるるるへきををるきはた
火のるわるを。書るもるあるるるわ入はれいをみるは
えみるををひはをかるるるをるをはるるを。
はるるり形るるやるるやうんはるるへよをを。きるるあるあ
るへるるへきちをりのはりて。をるるるはれるをるるも

はべりけるなん。あれすこ。

石原正明ぬしの書

さかりのころ。五十番自歌合の判詞からとしてはりかは
はべり。是を救かしぬ方よ。やまとまろ〳〵き事なるをかくよろつ
ゝ書てなりてこれなりのえんおきあるんを。
かゝるてはきをも得はべりぬ〳〵きれいとはかくまれたる詩よ
そはべりとそれなりさて西の年ぬは業よりとはる二者。
きをもこゝはよりみてよ。あ〳〵いゝとはるいふとをかし
こまれ。学ひのうさいまるき時よりあかもよりれかもても
はべりの作はべりなほさりのんやこゝ。書よむとをこのこ
はべりつれをそれをよめ者れ。めよちのきこゝはべりすき作

ぬこれて。度くもあきかはべりねこよはべりつよ。
此事をて一つあきこゝめこるるもはべりぬを。こゝはべりこゝ。
ちのちのき年はそむなき名を人のいひはと〳〵はべりて。
世乃ものを人をもの つあるよりはべりくるを人をはべりぬをてされい
いとやかこゝぬまれまて。乃ちちくもちこゝはべりる事よ
なんかくはなひの事おろておれいこゝ学ひの人なをの。
そのおうつよるもまこゝるのはべりぬ事のこれかるをまて
以こ一今の学ひよくはなくおそはべり。ひのあのきこゝ作
へこのをいそこをこゝあをきはべりんかれい
あこはべりこれるかあこゝのあんをこをけこのあちこゝ
はべりてこをこをこゝきんのをこをもこをきはべりのを。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

狩とる〳〵きりさやあるとて。ことさらもとめ給へなるいと
こゝろ〳〵こゝろれさるハ詞の法ゝ玉ゐろさんゝ共。芥藻つ
ゝもすてゝとのちんゝ〳〵はなゝ〳〵の侍ひ玉ふるかめ
きをそのゝ〳〵あハ君ゝちんゝはゝせつ侍ゝ〳〵もの中乃
ひとゝ〳〵ゝ。とゝ〳〵ゝとてゝ〳〵なけ給ふ事りてせよ学へゝ
物さちのいゝめ〳〵き名ゝもの未よあやしの義ゝ名ゝも
さ〳〵ゝ〳〵ゝ仕ゝん事ハゝとゝ〳〵ゝかゝへきゝ侍ゝて。何の
効いかゝゝゝゝられゝ〳〵ゝと仕ゝん。きゝ侍あれゝ。ま法ハ老よ
あやゝ〳〵みゝゝふゝと仕ゝり。今のせゝくせゝて名をゝゝむ人の
おかゝゝるゝきゝゝハゝれゝゝゝゝ

はゝ[illegible]ぞといふを又ものこゝろもあるべかなるに[illegible]いやなる
[illegible]ひて。こゝろめよ。人こゝろもそれなるけちをかくして[illegible]
事こゝ[illegible]孫うけ[illegible]者ぞ。もひ〳〵せちこれ[illegible]体こゝをぞかく
いかこゝまるいかとかめ[illegible]ぞ[illegible]つこは。さり不もなこう[illegible]れ[illegible]。
[illegible]れ人をよこゝ[illegible]ひて。[illegible]れをいまし[illegible]たこ。[illegible]
[illegible]きこゝよなる[illegible]。

大村峰住[illegible]こゝる書

[illegible]から付[illegible]者こゝ[illegible]より。學ひの[illegible]おこゝ[illegible]かちこゝる来つる身の。
今は[illegible]年月とかさ[illegible]付て。そこゝ[illegible]ゆくかこん
かゝかこゝるあこゝぬをひこゝみこゝきこゝたこゝ[illegible]あこゝて。
あまこゝこゝ[illegible]おもひ[illegible]かきぬこゝ[illegible]や。

さこゝれこゝろこゝたこゝこゝも百こゝ本の一つこゝ[illegible]ぞこゝ[illegible]きこゝ[illegible]
助こゝもたこゝ[illegible]きこゝ助もやこゝて[illegible]こゝ[illegible]つき[illegible]こゝ[illegible]ぞこゝみ者こゝ
[illegible]こゝこゝ[illegible]こゝ[illegible]こゝ[illegible]こ

おくゝ後つきて。罪をうる事なかれと。聖も教へ給ひよ
ゆゑ。かゝれそのゝちもてあつかひ給へきを。思ひもむけし
揖取魚売りつゝて。我食産の業乃法をしへ給へ。
夢ひ給ひつれて。其法をかれとおなしつゝ。業の家ゝ
名簿おくることをおほしたまみて。あるてなくことひかゝ
さはやとて。祈もこゝろよゆえ祈ふめるぺいそあるゝ人乃
なくひよなゆひ給へ。されるかめ給へんをもふいす。
こゝ詠ようへうゑをおくて。諸ひ仕るゝ。ゆうこのれかかんを。
さるかゝるこえゆゝし給へ。おくて古言をとゝれあうゝて。
五十連のこゑをゆて。きるへとなる事へぺよくゝ顕昭法師を
すてるよいへしちゝ紀そよおくひて。維波の契沖は異説やま

しる人も侍れとそいきをのゝ学ひの
ぼきをもよくかゝみあるもぬ業なる。しまゆ侍て
古言は学ひのぺとかゝるまにかすとするぺすゝ。その書を
よくゝ考くゝよみぺいすゝ今のこゝ侍をよくゝまのもきるよん
あるぺさはくゝ多月をつゝてよくゝつとめ学ひてその正しき
節よゝふあゝ仮をぺいそをめおくゝうをきを得むこゝふ
ひとつの物語あるぺをめつゝてなれいいをん。あゝ法師の考よ
いつゝれ音をて古言をとくゝ事をこめるこの我友義京字
万伎乃をとよ変をて。この比古言を考へ侍てきりとかき法
ひゝ。同しゝ詞なるをきれて。そいかきをつゝむをぺきとゝ。
ろひをつゝれいをとなりぬをいひしゝよの美樹のぺいとよく

考へ給へかし。さらはたゝいつゝくゝと同しゐなる一し。
はゝをつゝもれたゞたゝをつゝもれいかゝとなりぬゝそ。
いとゝゝしくれいそのゝくゝるゝ詞なくて古言ばかりゝ
よゝくゝうゝぬをきゝぬゝとれおしくゝひなくゝと
ゝ。ものゝくゝしゝそえ仔つゝる事あり。むゝ人のみゝよ。
五分甫といふ人あゝて。文字の形よりゝてゝのんをゝく
事とぬゝきゝ。客説といふゝみ。三十年を経くゝてゝみゝき
ゝりぬゝ。ゝ有一時ゝ。蘇載といふ人のゝくしか。
そのゝのゝくゝ。波ゝ水の皮肉花ゝ。ゝの文字を使くゝ
ゝくゝとあるをゝく。ゝ仕滑といふ文字ゝ。水の骨をいふゝ
こゝをゝくゝめゝとゝ。ゝくゝ学ゝもゝなんかゝもやゝゝ。かゝる

しゐの荷田のゝみゝ。我賀茂の義なゝ。ゝきゝをゝめゝてゝふゝこと
をゝくゝよゝくゝをゝなゝくゝしゝくゝる。ゝきゝ仕ゝあれゝ。このいつゝの音を
しゝ。ゝを用ゝるゝ。ゝあゝり。その道をよくゝ知ゝるゝ仕ゝ。
ゝ知ぬかゝくゝゝみゝきゝひぬゝ。ゝきゝれゝを賀茂の義ゝ。ゝ知ゝて
古ゝをゝみゝくゝることゝかゝりゝれゝゝ。ゝ学ゝ人ゝゝいゝあゝいゝゝ仕ゝ。
先古言を知ゝしゝ仕ゝ。古書を考ゝくゝみゝて。その詞ゝ例ゝいふゝと
もゝあ。又おゝなゝくゝひゝくゝひゝをあつゝめゝみゝて。ゝ行ゝりをゝ知ゝ仕ゝ。
例ゝ多ゝくゝ。ゝひゝあゝまゝくゝれゝ。ゝ知ゝ。ゝ。ゝのつゝくゝゝよゝその書いきゝる一し。
ゝくゝくゝれゝるその書ゝも考ゝくゝよゝみゝて。ゝ古ゝ詞のゝゝゝゝ仕ゝ
ゝも考ゝ一きゝて。又こゝ仕ゝいゝう一ゝか。ゝ一して心ゝて。おゝてゝくゝして
きゝくゝゝ事おゝほゝゝ一し。ゝ今のゝゝゝいやゝきゝくゝゝ

も。狂いて一の誤りる事ちおく。或る田舎人のいひかしひ
なる言も。古きの伴なれる事いとのなかりかるたくひまてを
よく打ゆひつもて。古言をとくのるに考へきたれ。
されを古を学ぶの正しき筋とをさて例とたくひを考へ
得て。つくくそれんをゆれと。ぞくきかこある詞あて
そは五十つの音をもて考へくしたくいるれをつく
もれをてとかるをもて。まれていとふつをを折るれいかる故
きをくしいを物をなるくしたれいぽるへしをつく先
さる名なるをきる故。きうれるも。ぬなるひおろをなるふ
人の古れ書のこを詠もしてそをうを世いつの音をのこ
ゑれをくんなくての詞をもとうんとせいをたるひぬ事。

すくて詞を例とたくひとをもれ考る時を大かこいを言を
吟くをなるめをさるをくひい五十つの音もていへきるの
ゑあるを。ゆつをいへるをつめるる
たくひのをを。をれをよりて考へしそはかなをれ詞の例を
考をくをおまてなすくきをそれへゆつをゆをてんをる
時。その詞の古れ書を正しくみえる詞のいてをいそはあか
よはをて。ぞあるいかくいを詞をとをを定むへきるもあかをを
きひて。かををいひ定めかををなるををへしをるゆをいつの
音いをもかくをあをるをかをいてをうをれやををきめなれいを。
それへゆをぽるゆをしる詞のををいつの音ををいて。
古の書をあとかをきいを古をといを重れををそを世をしをみて

やうなはきくもてうえてこなくてつのまくくしのこなは
れるひ定めてられいすーこの詞乃おなりかとといたんぱくへる
ぶかうちゆてはりてやうよゆゆとも古よりかあくしぬ
を誰かはことすーきかれ古れ書るもよくはる我くうーのこ
ちかてて言ひてといひかくいもんとするい器ぶきちかてを
とまて物のおるはるはとさるもむるのこくいるはるか
れるひとくくるとも何の益さあるべきことをて古れ書乃
んを言れる人を五十つのこを用るよそのたるよく
まれるかはるを契沖春海変茂の義なものはる考
へおよはぬ節をもつとくれるはるかといひてこの
いつくの音ものこをとくるまるはるかよいひめく

たくひはまくとの公助なくくぬ業ようくはくしめ今思う言る
語へる條くをんくまこの五十つくの音よいとなつこのくすと
えゆくを今かくくのぬこたまんるまちをあもたいくんいうへ
なひ語もさくんくときるくしはあれとおのるやくへ幸城
現くして人のんくれるはるうくしさかそんくをハ君はかはち
れるつまはよなんそのこめくしを語へる條くの語へいはるくあ
ふきくくつをはりぬあ死かくこかいやくくはるみかくし。

羽生田半良かもくへ

さいつれいうれくくもまてまを語ひつるかれをくくも秋の雨乃
きめやうれるあくくし人るまくくぬいさくはよれるまくすを。
かくこくよつくはるそくちくさくるるかくうをいとんゆくまはよ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

なき葉すはことはいへと。事くさ〻ふ屋きるのなんあるさ
てきるたいて一のおれやるみやひかるきくゆふ
やうよ。たきあるを。味くらいすゑてことくさんて
すて。後を羽ち後門の後時なるの。いやきよさるきて。
いつちかるる巧ある家をか人てあるる後るも。多くいなし
あとれるを。物のとまれ。るきんしいある事とさひ
もるるぬよのつよれすくさるの人乃んとやいちんかく
いを。ワうまくくしの人をるていふた後ふかや
きのるれまぐそよる後。百年とすき後るも。物のこる後
得くん人のいて来を。かなふ後るあきはふいとあう
くむさうこそかくうい定めはるよつきてもかの函つと

のるうこの人まるはかはれるそくくるとかつきて
物はかうもか一しよみるひて粧るれひんをやることも
あくんをはこうはうよふにくと一拍ひてよおを人のさいふを
このむふはけんはるまるあるるれるのさ一乃いとるはんを人
はる事をんあひくるんこの粧ひをはさんとあるて。
なんるれるはなん。紙のあれ義をるるすくれるる人なるか。
又いくくひうみくる事多きはをむへきつくるこそ作れ。
るれあきはくんのこうるも作はる。る國の古れをくなどいう先
しくいひつくるるすれ作るもいとん得かてきことよはる。
さる事いつるつきてふ。そしるの道をも。佛のするる。はる
なくいんれくしめかとはくる。そいとあるまるよ。ふくこく

おくゝえ付をさて四つ園の古れたといふ事いふ行ふこと
いてるるよがおのゝてとよむこのおかゝぬとぬいまへ乃
るみよる事きるせるのたいまるえ付ゝたんおそゝく
はまるくしのんるはくゝそかまへていひおそよゝて付めた
をるを古よりを所なきよりをあきゝめいひて初その人
なとのたりもとおもひをう付れどよくゝひめくゝし付るか
さきことのんとばゝぬこときる事れるんとゝゝひかまして
おもゝん人をゝ誰もまきよんぬ逸きれたおもひやそ茅おて
しはゝに。なれ事いようせたおもひさとそん人もあう
ぬへきれを。いそていやこかゝこうこそおおえ付るなれ。およのあ
さうはゆへきるるも多し。いと面浮うけんそうむそゝへた事。

ゝみまき行ひなんや。

一柳の古よりあるゝる書

きゝくまを又行ひて。ふあきてゝひとも内こう詩よかなひぬと
うけゝ海ゝるるを。いとうれゝんそもゝ人のきゝゝあきる
ゝみなとを。さきにをもゝあをしてそきうおゝゝ。ワつはう
きを人よほと所んとかまるゝことはそのえやめゝく者
まそ。そい人の名言きるねゝさよ。あ孔かちよけけとする
まれなれを。きひことのおほうるかゝひて。人をあんたいを
んとそか〳〵そまる名をゝゝたゝゝひもおかゝ先る。今
おのうめゝ付る事いさるえやめゝよねするやうおゝひさふ
付をとこれうはまるゝ第一所かん付うきる。あのゝるの義の

をしへをうけて。こゝ学ひの人を法きゝる人これ〳〵をと。
古言のまゝ引ひまくはけきことは。新の為れあるこゝろをも
すゝれまゝれ。義の好ひのこゝろをもこゝろとも考へあきらめ
るなくゝ引ゝくて。此人いてゝ後。この学ひの為をおそれぬる
をいこゝきゝゝさゝるこゝろあるもの也をしとせん事
い〳〵をさゝゝかくて今い学よ名をくてたゝてみきてかゝ人も
引ゝかゝるゝゝとよ後こゝはきことを引るゝゝ只その分れあきつゝひ
をいゝゝ云ゝんはのゝ引ることをゝきれゝるゝかはゝしき
きはの人なゝれまゝかゝゝもあゝぬゝきゝゝすゝれゝ
人の引ゝこゝをいゝんゝ。人のまゝゝふゝきゝゝて。かゝいあゝゝるれ
分れをゝ〳〵も。此人よゝて法ひはかゝれぬゝきれゝ。今その

分ゝこゝをあゝゝめゝゝゝて。初学の人々のあゝぬかゝゝよ
ゝみゝゝはゝゝん。ゝきゝゝ〳〵ゝゝゝゝをゝゝかゝゝゝ
ゝゝうゝゝゝゝ

かなる心ともつれすなるべきもいひつゝ
うはさしとするいへとこゝ語のつゝなきゝ。るくい道遥院の
れ〳〵ちゝくい實隆のまうち君かとゝ世すなるゝを祈りし給く
也と。今よりうれをよれとんかのたりやみてがほるめゝるを
みてゝうゝうんちなるぬ人のきひてまるたゝひてゝゝて
待りきれ。やゝておれ〳〵きゝその人のまよやしうた。人
るゝ〳〵なる家れ。いてまうてまるやいあゝんかるゝるはゝと
のよれするゝのゝようみいてんことけ。いとかゝきゝたゝて浦も
よみうはゝうゝ待れと。やめてんとゝるうゝたゝうかまゝてよるも
ゝ浦なるかゝゝよゝおうれきんやうまゝてあゝはかしうはふ
なれ。あれかしゝ。

詞の清濁。古言清濁考より法ひて改むべきやと。人のよく
まよちゝふるゝ。
古書れ假字の清濁乃事ハ國珠庵。縣居なとい清むべき詞
よ。濁る音れ文字を用ふるゝいかなるゝ。濁るべき詞よい清むべき
音の文字をもかゝを用ひる例ゝといまれゝゝ。きるを玲の反
を。ゝとゝ心ひ如ゝて。古言をかなゝ假を用ひる文まれ
清濁のまふ唱へ。古ゝの清濁を今れゝの人れゝゝ
唱へなれゝゝまゝ異なるゝ。人乃ゝ異なるゝすゝゝて。
古言を今のゝれ唱へよかなゝんとて。清音の文まゝて。濁る
詞もかゝまゝまゝのなゝとれるへゝ。いゝき誤ゝといゝ
ゝゝゝゝ。古事記伝。むかつゝれとゝよ妻ゝうゝえゝゝかの

清濁考に。師説によりたることゆれども。全く鈴の屋乃考
なるべし。されど古言の聖ひに。鈴の屋ともうくはき人ぞ
ふかきれに。さはうれ人の考へ定めたる事なれば。かゝる
説きあるに事といれるもとれども。猶うきかうふふよし
あるべ。これに春海かとの学ひおろそのかるるすてるやすく
いとへきかゝねと。今試よいとん先清濁の事をいふ。後日本
紀以下の古書をば正しかりたるとて。すべてとゝにあるべき古事記。
日本紀万葉を援とし。これを中るも古事記をこそ正し
うし。万葉をこれよつきとうとし。日本紀をみるかるかる
べしといひて。さてその三れ書のうへるもれたる一詞は清濁の
文字を交へ用ひるをいかるを正しとして。一かるをば

正しかりたるとせり。又日本紀美撰もたゝしかりたるといひて。清
ひと古事記をさへ。正しかりたるといへる事もあるべきにあらざ
ゆるまきのいとをとおもふ。杉のの濁音の文字あるべきにあらざ
れもし定さる例よ。清音の文字を用ひるをこそさるいとや。
そは先達の説乃ぬくぶこゝきゆいは清音の文字をかは用ふ
事とする時に。疑ひなきうなるべ。あゝるに説をもて。文
字の清濁をかゝれに文字の清濁のまゝ唱へしと思
ふるをもむきいは。此疑いあるべ。されと古書れ文字のつゝひさは
をば正しかりたるとて。杉のう説をのこたてんとするをもひ
さるるはあるべや。もとよりの古書をよたゝしく。清濁を
まかちかるとゝゆる不をあるとてそれはゆさしく後の世れ

清濁とは吳音と漢音とも。なほくはしく無しとはあれども。古
すべて奥州邊なども。ちゝくつきて出る詞を後世の世
清濁吳音なといはれしもあり。それは必濁音の文字を用て。
はきれがれ敷。さて清音の文字はこれて出るか。ゆゑ文字は
まゝ呼る時は。ほぼ世の清濁と異なる事あるいその少ほ
ふゝる詞とは。清音乃文字とも。かゝ用ふる例なるとよりて。
きゝくゝ後の呼よりて。文字はまゝよい定めさるかぶ也
先達のもゝくんとくはしくよりてきうるはあれど。古
書の文字は用ふはきはゝと定かゝきれる。ふきいやうゝ
定めかゝきい。也濁音は文字のこゝてきるもの
よりあゝされる。鈴の音乃説。あまりよる事とくはしうせん

やうして。古の清濁の後乃世と吳なる事あるをだに。ふきうる
べきあるとそ。すべての詞を。その例とあゝたんとそひ入るゝ
れ。一ゝひなほ。二度かつゝぶひよりはゆひやくゝ濁るべき詞
よ清音の文字を用ゝる事。甚いちゝるき説あるゝそあま
るゝ先よりちゝき事なるをよの翁考もゝさ行しるいとく
いかしきまれよかん。さてそもゝる詞よ清音の文字を用ゝる
説ゝといふゝ。万葉集中よかくそきうそかゝうそかゝうそ出る。
なとあるその詞。皆曾文字を用ゝかゝこれ曾ゝ濁さしき清音の
文字なゝるよいあゝたやかゝ。教のその詞。叙序。なとい一文字を
用ゝるゝ。ふも多ゝうれど。夫い彼かきかゝて。曾文字を用ゝるいく
ふゝとも教へも者しかゝ。さて曾い清音なる事。もとより

論分されるを。已曽。許曽。分と用ふる事もいくそばくとつ事
をしられまくに濁る詞は清音のまをもかゝ用ふいちし
るきことはあらをやてとその詞のをかくなかとつををれをも
あるまし。されをいつれの詞をも。ふる詞は清音の文字を用ふる
事をこそ録なし。かをいは先達の定めいをれる法。うをゆし
うををおはれおのの。ををのやまを書傳する日を。月乃
五日とつふ日ことを。日本紀の日と定られを。八月五日をいの人を
まうて来ぬるの中よ。也尾糸賞の問ふく。古言のすみをを
はいの定めをの讀ふへき。をよは遠に人のもをる清濁
考を後ひはくんの。いをとをへを。かの清濁考をもしくを
乃ねと後ひかをきます多し。清濁の事は師のをしへられる

ます。清へき詞は濁音は文字を用ひる事はなく。濁るへき
詞をは清音の文字をも用ひる。是をは古書の清濁は
事つきぬ事。古の清濁は心しくをもをれをと覚ゆるも
まれくはあれとををいをくはをふををるへかをねを。
大ををは今の世はひかれをるは後ひををぬへしといはれをう。
此説はよりてをぬへし。系寛はへらく。古言の清濁をと
をくをの説あをて今をは異なををり。かの清濁考はへるを。
それををり於ををる後は別はかををし定めをる事あるをと
いふおをのうををく。ををる事。四の師説ををかをう。考はをる
事あるををれををくを後は。のあをうはをしかをしといへを。
ををいをおをおをををををををて天せ給へをとあをを。事ふ此書かう

すゝまいとおもふ。後の五日をもち給へとて。五日いまるれぬかく
ちきりつるれど。一日二日のあひだよりきてこゝろもとのせんすのこゝ
うきれそ。いさゝうおもふ。五日つきて。系寛よまゝ〳〵ぬまの乃
清濁の事。狂いて〳〵きすも。文よ考ふ亟きもいとおゝおのれと。そ
もいかさまとてこゝろのすゝきれ。ものもとゝかとゝ。ゆよなん。

出家院雪居禅師のもとへ

鹿の後苑乃ちあるさ海。いすもゝもさひとてすきてゝ逢待う
めるい。蓮の世よかゝ清ゝ多のなゝひと。行ゆゝもくまを待ふ
〳〵きれとかくまておゝゝかち形ゝゝ。ぼみきり示おうおは
え待を。恵ゝは。あれと。葉つゝ和波ゆつくゝいとはよゝるおき
示知葉のあゝれゝを。ぬきゝのみやひも。狂むゝふかゝせ

ゝはもて。衣のうゝれむのゝかたゝらの葉れ見をさゝ〳〵かきそ〳〵
ゝふゝと。萩ゝ示ゝさく。ゝるよ。ゝゝゝおゝはを待ふよつきそ。おはろ
葉なゝ。仏侍〳〵ゝを。ゝゝゝゝゝゝ。はゝゝやかの菴菴の義い。
ゝはゝゝゝゝゝむつひかゝ。ゝ待ひつゝを。すきゝゝ初秋よ。ゝ乃
とれ雪ゝゝゝも。ゝゝゝゝゝゝ

して初しきるしあつとうそおぼえ侍るなれたやくようそ
法のれんおよそをきくよ。るあかるれ翁のをくのおもむ
きよだうつゑくもあくしたなんだうえ侍るしういこやくし
かをそぬあのうそ狂くしるの人のやうよ。きくはうそうい
まくうは侍りしをや。あをれ。老をきいをのなくいろ侍れと。
ことわりをうしひなりといえもうひをまをかくうれ。
をくもをうをくゆえくしは松風のきくえぬといくうかをくさ
なくまくかをといくれもくくころはのくくをくよいひを侍る。
よかんあをすを。
かなし禅門のもくよをおくくれ。雅俗辨を論して
ちくふる書。

七の賞れよをほしをなくくれまをもの人さ論して。
内法乃至の点をさえておくをうれとうを珍をるいやを侍る新
よ侍ることもし半れ書法も事をかをくてををかをの侍をとい中世
むををちをくなりをて侍りぬるよいとくをてかくいる
はくよを。ふひめくくくし侍るよつをてもをくふをえ受をかを
きくををるれきつをれを。此比芳室園の翁うをくを消息珍
をうつるをえ侍るよかのなるよかくしを家れ事をも翁をうあを
侍くひくをくしついてよをを法もをとくを人侍をくしを。又をの
むる人のあをとをを人のい人るをくもかいつをてを法をも
えををて珍ををくいうれくうなんをれをかのあ半侍をい。
をくをみのをををそをうくをもんをををくくしを侍りつをを。

ことのわかくはべるんぱ。まことにうきる事あるんかし。そるに名
をもかくしはべりてそうとあるべきれまたなりといへんもきこせし
とそのたそうれよはべりしをいうれる人のいひもしはべりて。
さはさあやうさいかまし仕る事そと。今そくいこひはべれ
ど。さくよかひかきまたはなんと。又かのあくはべひのきうて。
かよはんする事のわかむをいさうきるはべりしをいく
こやそうそむきそうとて。雅俗雜といふものいてまし
をもさくきみ。珍へるいかあまり。もうけうなんその
雜といふをくかくえはべるんまはうんまは。狂うへかし
かるき事こそおほうはべりきれ。今と人のるあるまはうの
とうはくはうはえはべるんをきけしたまひてて。

あれかちよ人よかるんとあすはさはべれ。あるまうと人よ
あるそあうはゆるかれる。かるるる人れえせ珍ひそかる
ふるいあるくたてるかるはべるあよはべれる人とわるあ
るはうとなるんいさてもあるぬきるるをきひてれ
はきあきるほなんいあるをひぬるとあるて。わるぼんを。
人のんをうむるるはべりぬきれをいとはるるうる。
きはうかよはんするんをいよ。をはるるの雪の調をうて
いひはるいつのみるあ事をいよ。もるきるたあるをうを
ん事をいるそやとわるる人もはるる人きれと。れるるいはを
あるるるはんたるるうみるのいるるるの人のかれ事。あ
きはるるいいる事いるのよるえはべるかの貫之めるよ

いさゝかてゝ　しめて古今集の序よ。ゐれんをいあきつゝもれる
ものかれを今うよあつて。ゐ乃事あきはゝ〳〵ひけゝんい賢之ぬ
しをゝてもゝいかゝ　はつつ毒きれ。てその賢之めしゝ乃
きゝるれるれるむきをいうをゝをみるゝ。をゝゝゝかゝゐ了
るゝゝんよをゝてゝかゝこの事をかゝてゝおつの為れんをいあつの
されはすゝしゝくゝをいゝるゆえよきうゝをゝつゝか毒も
やゝゝも。ゐいゝゝゝれかゝ　まかれいかゝへゝかれいまはう
ゐれ事いひはゝも。賢之めゝのをゝへよゝてゝもゝこゝれ
事ゝもゝいゝてゝいひはゝるゝて。賢はゝゝはひおゝゝこゝを。
よゝ不とゐゝんゝすゝゝ。人のうゝかよゝゝき事とおゝへゝれい
ゝゝ。つのゝゝゝくゝしのんはゝをゝゝてゝいゝんゝるゝゝゝゝいゝゝゝ

はゝゝかゝゝきゝをゝゝれゝをゝあゝゝゝゝゝそはおほやゝのあゝきはゝゝひ
ゝゝゝいひゝゝゝゝゝゝゝはゝゝゝゝゝゝゝ

之者足以自戒なと行るも。みやひことは。不を何のあやうけるをむとかはへき事のおをいへる。文を成といひ。文を主とはといへるなり。あうき味をひいはるきるを言之者無罪とかくとはるいそしむへきなり。ちつきはそしれうむへきなり。ちつもたるをもつて。うるはしてゆやうをんをもはる。風雅の本旨なるをいひはる事くさしる諫とも。風諫ともいへる。もし人をそしるなり。うちつきはつるをくんをあはけ。人をうるむをなるをちよをたをすをすをくいそんをぶるつをを人のいうをおこをしめて。をれをいひ人罪をほんをとをこかひなし。そいかの直情経行といひあるをはは。はあるをるをかの温柔敦厚詩教なりと。聖はくをひ

出るも。主文而譎諫といふんをあきれるをされ孔子の正義をこれを釋して。依違風諫不指切事情故云温柔敦厚是詩教也ともいひはるきよの正義の説を合て。詩の序はいるもはのをいきうの詞もをもはれなりきるをいはるうるて。これをて。詩乃おほむをいつよはるぬへし。其為さはよのあるはをかつへいひはるしとかの辨はるはる人乃えていをくやはるしいんはをそは其為うるをしのんはをわをひをきをていひはるへいあるはを経傳乃むををはへはるへ事なるをや。又かの辨は。温柔敦厚を詩の教の聖語を。詩書禮樂をあきはるへ時のををてをうをはるせて。かをていはるはあるはをいをれるをきをとあるをきひて

まさくしのんさたそんとて。紙しはるく。詩書礼楽をかなく
てあきつくもん時うもの。詩のおほむをいはるほく〳〵き事
ますはるたやそかくくよ温柔敦厚のおもむきをもむきた
るを。風雅のたよいあく〳〵さる事よなん。又雅よ。風人のんを。
かくもたれもをとしかるへきをとれまして。情のうくをほゆせ
てをきくもやをくうもいひいてんをを。思無邪とあるかも
かなくへきれとあるいふをくんを清をくをこの雅つくれる
人を。風人といふ。風字のんををいうをんはるをふう。鄭氏の。
毛詩の箋よ。風化風刺皆謂譬喩不斥言也とをえて。風とは。
ものをまをていひて。うちつきよ。あくをふをんをいをきをを
いつかをを。それを貫之めもの。この風の體なる事をいをへ。

とを名つきをれはをを。をて風を六義の一つなるを。詩
人ををして。風人ををもいへる事ぶをかるををいふをを。
六義あをて。おのくくを體をなれをもはのをかをを。風を
者一をする事をを。をを詩くくの體。皆この風人をかををる
をなくて。がの風化風刺をいふ。をやををのをなれ
をを。此風人といふをのはるををを。をををををををあをを
なくいひいて。直情径行ををいをんはをををくくをを
ひををの道を旨よ。をを。をををををををををををををを
情のうをくをはををて。はををくをををををををををををを
をを。あををなくいををををををををををををををををを
いををのくくをををををををををををををををををををを

意よまれたる。詩をよめすべきものとおもへる。風人のはなし。
いうてさる事いふ。いにしへ古より今にいたるまでか毎
年。大和国。おなじやうに。こえてなきさるなんはな
けり。さてきうこきしきんを。ひてかるゝぬ事あり。風人の
いさんはさいゆえぬさはよいひてはつうこよ。をもむきを
きうするやうこそいひはるへそれさてしもこやしこと〳〵いふ
よなんや。この。思無邪といふ語を。こゝろにうるおうるおよの
此語。魯頌の詩乃一句を。聖の門出てはさまへるもてちるき
法さくは二つ乃説あり。そ一つは。三百篇の詩を学ぶよ。此
魯頌の一句よ。思無邪といへるんをもむとして。学ぶ面しと
おしへさまへるさといふ。又一つは。三百篇の待多しといへども。

そ待のんは正しき義にはかなひいる事。此思無邪とあふ。
そむきる事なしとの詩へるかとせり。今いつれの説に
たがひても大和なれるすといさんよりなれひより引出つる事
まはあるぬと。此雑つくる人を此聖の詞をいうれるるすを
の詩へるくと也へるおかさるもあるぬるすはんをんをもよく
まれまへきゝさんを事とみるるよるを不とおしてり出つ
面を事乃住今雑つくれる人のんをくみ作るをいかんて
おもふるすといるまかれる。詞をあやをかれてもんのまをいひ
をんをまくるをくし。詞をかさるあやをかれをとるつくろひ
なる。いつくりるものやうまへをとえるる。さを多い事乃をと
かりるるうしをといへる。えせ多人の詞のことを。はをるれをと

信していくばくもいまを〳〵るまで。風雅のこゝかもとよくゝきゝ
ゝかくんとおもふまをいふまなれどそろいひさはやあやなる
をくれ。風雅なりといかすゝきれ。そのあやをかなといふもいつ
くまでゆくゝるはあって。おのつゝうる詞のうけいかを。
多くいよき人のあいひそおのはゝるゝ多なくゝ三つのそ
につきそおのつゝうゝよ不ひきゝるめくなるをいひけることや
さて来のせいゝうて。この詞はあやをかなるゝのれて浮華
よなられていつきゝるゝうゝるといてまゝくんをゝそゝ詩
しといふゝへきれ。詞はあやをかすは。文雅のかなるをわ
つかて。狂言綺語なりかといひてそゝるゝへきすゝは作す。
くゝこの世はあうて。ゝんのゝゝをたゝゝいひいつゝも雅なるを。

俗なるとあり。はやをかして詞をかさるゝも。雅なるを。俗なるといい。
作る事なれそゝきちめをよく考へゝうひて。そおもむきをえ
ゝるゝうしていあるゝかゝまゝ。さて詞はあやをれすおのつゝう
なる言のをれをゝそかゝこのゝもゝをゝゝるゝ事ゝそゝまさ
我国ゝもゝはゝくれなゝ作すゝるゝをいすゝ
ゝのゝをゝたゝくゝかゝまあやゝゝゝるゝすゝいひおゝる
まのあゝとおゝゝるいゝ古のゝをゝをゝをゝくゝるゝをゝゝひゝすれゝすゝゝを
してみゝゝるゝゝさいおゝくゝるゝゝていゝゝいゝゝゝくゝきゝゝ。
今ゝのおゝゝをゝいひ作ゝんゝかのゝゝをゝゝるれ作ゝゝ。
ハゝゝゝゝゝゝきゝゝゝゝゝゝ

珍しくて。うちかへしてのぞいてまた。俳諧のあやしうきこえぬ詞のあやうきようにて。けんもこゝろてに詞の外よりぶきにおほしのほとゝぎす。ぶんやゝれはるなり。又ぶれ父母といへるこゝろ

ふる雅波津の歌。一首のおもてにふるのるをいひて。あゝはよい。をんをいひやつれた。安積山の歌は。ふれ井をかけて。詞をのとよいひたおるかと。皆詞をあやなやるフリて。

さをかゝのふるくゝるかの風人の本旨をよくかなひ

付る。すべて詞をおらしたるかなるは桃詞をもちい。序歌をいふまでのこのおほく。譬喩のふなとゝいふのはるそ。いふ

しゝの歌。詞をかさりてあやをれやるあるなる事。ゆゝ

きゝしてあやもれくゝやふふきをいひふつるかへて

後のそれ幸まて。みやひうる言はなのあるのあるこかゆくよろむ

きるまはなるまをきるへし。さてそゝるもゆき。はうつろひて。

此詞のあやうはやうなりて。んも詞まうく巧をもむる事

とはなり付りまきり。されと花心一條のちはまてなるいんよ

いつもゝるゝうなくてはこゝをうしなくるさはかをれを。

こゝはなりして上つるのふい。行のれ風雅のむよをむするか

多くなん付りきる。こゝはなりくゝるりて。後多羽士後門のちはよ

いりて。人ことをはなるふれするをこみはりていは

をゝゝゝうをおほくかはへまことをうしなくる事をつ

くるをはりてよりはことの風雅のおもむきをかくれゆきはり

きり。さてを後かの為菓大抵云かよ。新古今はまりの。

巧まずきこゆるを。つくづくひまなくしたとぶそれなる。
さる事うけれとそをあくなめんとてあはれまとを
いひ出るをのそよりて事とおもひあやまれて詞えらむ人さ
あるともおもひこそいとやーきあくいてあくめるを
ふをとゝなきこゆいはのれるをしめてなかきよすきなるとや
いひけんこれもまた風雅のむもよるをいとなんけす
米る。いまくゝ様こそもけらーの詞をすていひけ。新
古そのふい。纖巧軽佻なりといふ人の大綱のまうす。
曝露率易なりとそいひけ。志のれいふい詞のあやなる
ま。こやひこのはこのすちなれとあまりよ詞をかさんや
して。纖巧よりうれてぼこをとくゝかこさんやくゝあり

ぬ。又ゝこゝとよう。もこぶんのまをらひつゝとろ
もはくゝふなれと。率易といそんさるよつゝ形くん詞の
あくひさくんやくゝよあるぬくきこゝとのすはのあるをを
ひやまくゝさるとまこのの風雅のむもよかるひくゝとそいひ
けるくきれまたくこゝとふといふ事をとかくいてそれを
ふれまくこのさはかりとおもくるもいくきあやまりくだ
くゝふといふまふれひとつのすくゝそれるはよくこのつ
いひさはある事まて。狂詞のえくみかきくるもあくぬる
よけるとちのきけの人乃たくこゝふとそよあるをこれをあ
何の用意もなくくん詞あくひていとやーきかるいかはは
いくきくけるよなんいすくこの人のくくこゝふとくるをいとう

さるたくひなくんかよかくよこれも文雅といふ事のなを。
ますれるまたまそはまそはるやうにかくやうに人乃とも
つふことはいとくあるはまきてうまそはるあれかしこの
ちみえらはひくくん後まいこくかいやうたましてよ。
むつきとはのあまうやうう
自寛のもとへおくる書
すきしはい例乃程とくもよかくくあうはすはてんゆく
まちよなんいよもいおくくたまふやあくゆこく
風をさまうおほるるとうもうくうくん
そへくはいねうすきしはちものかうはすはもし。
冷泉侍所のまて来て、伊勢物語の傳注といふものを持つる。

清風の右禄の序こまいとはくれまれといたれやつかを
そをいまくえはくねいとをもかうもまくをもしを此比ちみ
あはなまへ人のまちうしをそうてえふこをいとんもせて。
くみよかくれくるものうやきもはばれことのこと。されや
かくる事い後よりくるもかくるなすくきやくおきれいさても
あまなんのたくに氏のかきさ国のいのうそやおちゆることあり。
荷田を閑田とかくれ。何よくれくよう。いす一弘仁の時。
姓氏禄えくまれきんよりおなる。姓氏の文をいこしき定め
ある事ままみくふまくくのんもて文をを改む一き
くくよあくた大江の氏も。右大枝とせつると。音人のての表そて
まはりて。大江と改めんことをたくれういやそてみくのま

なりて。ゆゑ一ぱひつるよう書改めし。公義と略る。その祖を
同しく。こゝ堅も同しかれど。かくせふち来ぬれをそ城みゝを
なる人いあれど。かゝるあし狂いとおぼゆる。又東方呂左海
なるものがき書されし事。あまさあるをえゝよ。こゝか荷田と
こゝ伊を。かゝやゝとゝ海なる文字をかれしるいあう
さりきれるよ。蚊と閩と。音同しきれい閩を加の假名
よ閩ゝれゝるものなゝん。ゝいゝとあやすれもひるく
字書を考ふるよ。蚊も閩も。音文といあれど。蚊蟲の蚊を。閩
とせしるい。蚊よゝえす。閩よ蚊字の義かきこういなどう
なれいかといよみゝるかゝ。閩い地の名なれ。その語のまと
ゝ。爬蛇の事より起きり。そい説文よ。閩東越蛇種也故字

从虫門聲と云えり。もし此をまゝ國のゝと考して
よゝんとなるい。へみといひもつ角しいそ加とよゝ
へきやかゝれいゝ一ゝよう書来れる文字をかくかきあゝ
此世ゝ。ゝ國のいゝ一のかゝてゝもそむきゝまゝゝ後
きゝの文をれゝとゝゝゝゝたゝ人いかゝゝれかすゝゝきつさ
なゝ。たゝちゝきゝ世の情さゝもゝくせゝて。姓氏の文字を又
たゝゝよ出かれ事代あなるいかゝいゝゝくゝも考へゝぬ人の
ゝ氏ゝて。いゝゝゝたゝゝ。いゝそゝゝ國のゝいすゝ人のゝ氏
ゝなきゝあゝけゝといゝゝ。此者孫せよゝゝ時。きゝる
ゝお出ゝゝ。一ゝ氏ゝゝあゝよゝゝ。かゝくゝよゝかゝゝもゝ
けゝくゝけゝくゝんいあゝゝ。はゝんあゝん人のゝてゝあゝ

はすまゝにけんこそなかきれ。右絲といたゞく名のことゞく
しういひつゞけてあつぬへきく。季春の縣を今いやそよ名う
かれそ。かの侯注のおくれもれん事。此序のあるよりてぞ
を皆といふなるようもあゝしかつる序なりとて。その書乃
おくよりものんさつれめつるみえをこはう縣をもあひ
けつゝひ弱ひて。いまよりの後のなよいはをきすて給ひのし。
右絲せるあゝしはもおのれもいとうるはしうしはうつる
を。今かゝるものをかゝるえはるもいとやすゝに
おもひさまくゝれいくそうゆえまるなりあれかし
さ。人のまのいふとゝおもひさまひそ。

辭はよおくる書

をゝつ日をむゝうるもとをとゝせ給ひて。ゆくまおくち物語
ゆえうをまはすし。いふとうれうなんとゝせ給へるをち
をもちちるゝへとくゆえさせつ屋よを。老ふ年はるる方の庵
さへくはすて。ゝゝくゝしうも物はすゝしいとゝゝ
半ばるまれよなんはるひうとる。さつふ考へはるて。
先ゝちちゝ語もちひのくはすきゝ呂ひの屋きさふなく
ひゝをようおゝはるゝそめつゝうなれ。れ乃れはかとゝくゝんの
おくれくゝよ。今いよはつるあゝまをかちなれゝといせうよ
ゝとあるゝもゝかしゝきゝ耳を屋むへきゝるもはかはるゝ者。
されゝ。内物をゝむゝしゝとゝいはれいあゝぬゝるゝことゝひとつ
ゝるゝつゝちゝへよかいつゝはす。行ゝは事なゝひはくんさいゝ。

かくさひをしへあはんうすこをあくはゆかりしきにあれうす。
うるといひてはうとうくる何の格
二十一代集のうちよりといひてはうとうくる詞いとま
をくるを一つとふきてうるいうかといふるを八首うも
あまりてやはうくるんうは拾きよ。きのよどうはをむと。
いかるいかるうぬうくうえてくるや君とあるもるを
ふとうくるきいふる格ゝはをいはうはいかくうくる格と
同しとして。定むへきりとふひはうくるよはをうくに新
載集雜中よ。為家て。そむききん。新のいとめれ。かるき
よはくくるもの。ををやや。又後撰。きくれいはてふ
こくをめれきめよ。ゆるくるもの。をくをくきる。此二首

かくといはくといふをうきくる格ゝはをいはをは定ていふ
詞もあれど。又はくとうて。変格もあるとみえるかのくく
いふ詞の格はる。るくといふ詞はうくる事。なまくいあり。
あれきよ。なつこかくくやはくん。
いはるくといふ詞はくいうつか物語よええはうはいふるを近て。
いはるるといふるゝいゆの反ふかれをいふとえ浜なれど。音
を通をしていふるをはいてはるるといふるゝ通音不して。
反切をもう用るくこと古言よ老よあり。万葉のくくは。
はうくくを約めるる語ゝるいふをはるれ反かれを。
返をくく用ひをうはくはうくくとをいふくはるくくと
ていはの名目よいふ詞なくをれはほの反をうてをの

ほうの語をつかふるなり。此例多く侍り。

久めるあの古きもく

れる光彩ゝゝ古せうそこ珍かつる。かゝ。そいと黒ぬすびんの。

ぜまつ光ゝゝ れ ゝ つるほゝゝゝゝゝ が ゝ て ゝ ゝ ゝ ゝ 侍ん

よせさまふとゝ ゝ ゝ

おくせとおと殆ものしいぶとなるおそぬんとなんし
侍りきるよのみて集日記たとうせすへるいぶとうるあんさるい

本居詠日記

ちみちもうけかりきの本をのしふもの詠をこつめて
さほすを
おくものさきつるつるをほのろ侍き湯ををけへそいくめ
とをおゆい侍るをいとみるかをこう侍れとがの侍すへ
ますゆえあきくさまくや。
おなしいのかろう侍をへかを
並歌の侍ふ殆をるをいとものかしをうあんさをのをれをを
をそむくこの門ををてをや侍るへくがつい集ひ侍へくへて

ますゆえせ侍るはしかをかをの殺うおめておくこうをとよ
詠こひゆえまるくせんもおかくこてかんあれすしを。
越おれからかを度よ侍ふきをるんをへおくを書
ゆのよはうのむか殆ひて後をおのつうを言るれよふなるん
ちし侍ふてを侍歌のかれすのをひをまをを侍りしを。
きのよゆくりなう却おとろうをせ殆へるい萩のうれ次初風
よるをるいとめつくかよかんさるいををへををちつやひ
殆ひてまんようひれ。星のあをせををのひいてるへるをのい
とも二ををうを一てをめーまへうれへうれをきをんこめて
ゆき侍るよををすは一るふうををを入てをの殺了
おうたち侍るんちのををれ侍ふてをもあや殺うい。誰もく

なるべきことつゝみてまゐらせ。あんのうらきんとかはゝもこゝろのきさき
さみなりや。ゑまよ大うさこのまゝにてこゝやらことものまゝせまゐ度の
ちまゝうこゝをきるかゝきれかゝるよつきてもぬらるゝとしす
せまゐかゝるすくせ。おもゝしゝ結すしもいまゝ
一時の爰とかはひかさるはゝなきせのさかゝてつるあき
まはまゐはれきのまゝかのゝ日十九日ふあゝゝ結すて人ゝ
ゑなとゝみて出乃ひおはすゝをさせうそさらきをおるる。
いとゝあゝはゝいとゝかんつゝきれ結すめる人ゝゑ
ものなすゝゑ。ねるすをぶひゝをかいきるゝてゆるする城。
屋ゝいゝゝゝきゝゝかるゝゝあまゝたんめれた。
出のゝれゝ作つゝけやゝし於ゝんゝすゝいゝせるいはゝし。

犯人ゝのもはれいそはゝゝるもゝ結すぬゝ人ゝるいゝ
なきはゝゝそ。もゝゝ結すぬ。あゝゝ。

梨後集巻十四

雜文

河つらなる郭公。郭公を巻といふことを歌にて。物語もみのうらなどよりつゞくる文。

まことに初瀬まうでせしこと。いう月廿よとて。おもひしたちまけり。先相一よ清水よりこもりて。例の河つゝのやとりよりぬ。杉くのおい人多く居こみてせきやう引さし。扉風にてまはしたる。あこめ居たるつゝい。初にまし。先くもあなたにいてゐるをさいつは奈良坂まで行あひたる人こゝにまゐり。あ一法のやつこしらへまことをさゝふ。うれふあまさ形かきしてやまなしるべ。よ。あこ人と

めとゝ笑ゝ行しぬ。ぬくゝ形くこゝやとりせしもをの
童れいさうしのゆゝまよりてかいまゝれと物しらてゝ
よくもゝえをかゝ衣すのゝれきまゝ形るをのこともうち
よりて。こゝもいはなんこゝ珍ゝへきとてけゝへのさうき
かとし。おけくあすれるゝ物ゝまのなみさるいつれの
屋れ女房ゝのとだくなゝ見ゆくれぬきいゝ河つゝむゝひ
居て。月のいつるをよはきかとよ物おと志つゝゆきて。出こゝ汝
波うくゝ行き。山風遥ゝ吹おろしゝ。村雨の雲を。
名殘なきまてゝ吹れて。くゝ形くゝしいてゝる。雲も名殘
もゝをおけゝる。文明ゝ年ゝ。ゝ人めなしとゝゝあゝん。月
こんとて。形くの人ゝゝちゝうゝいてきぬ。いよ汝ゝとよはら

なれいさゝいる月の光ゝをゝれて。ゝ形のきあゝゝて
こゝ。白きゝぬゝくゝもゝゝまゝこゝあゝ。なゝこゝかゝもあり。
ゝみつゝゝゝき形といさゝ。ゝ形のかゝあゝきかさゝ形れいゝまり汝。
ゝゝゝい皆ゝあゝえうゝ。ゝ形ゝゝゝき形るゝ人とゝえゝゝ。二もゝの
扶をいつゝゝのあゝんと。水上を書くゝのゝもゝもあり。又ゝれ
ゝゝき漸とゝゝゝ

初せりなみやふる月もやとる花よ

とそ花の春をつきてるをなすれさるにつまとたこゆかくる

をりよ春よはてやさあらんよーやちはきを形るまれを

かさをきたる人をとめーかとなへいあしきのはやよ

月こゆ初れさりきり郭をはのうるかのる鮮きしよう

とかまて。きのもとよりはーいもるりおををて。あれうさてや。

あるー人ひりきりとて。皆れのかるよかるれんとをされ

やこやはの人人のせかれるきいなれいるやあるんいるく

ちちーふとちもあるて。ひよををとりて入ぬかる人や

ぐれまちもきてそ。くまれかるーえるれーこをねるきれさ

はきかへーせさるんもまれまーかるへーるといふ清。

かをそよゆゆれい行ものかをとりりをやそ白をきー

しのふくたきしりやるとそのあるきるむすいつきて。

新を月よかるーーきのひきをいつれのをりひりまるーをん

とありそ一あるのとれりよもあれうちるるー月いくや山の

をふかれて。河波乃をのたりりすみをるりぬ。

對月言志とりてことを新をてかをること歌

いよたをうかをきて。ちけやく新を初をりうちはりて

はるーーひうれそ。はのつるーんれ菊を名残おくてな

へてよ秋つのをーーれ。ーーれそくれかくーひ出るれさるいちち

くまのふを秋のまはひををを。糸竹のきれ初きをすはを

歌んたくひかえ世をよかまあいるよれてよのをうーさい。

又まいさ〜ぺてやすみかる光の。そくあくそれて。人のめ
とゝめんよぬたゆきさそう彩るもとれのまゝ。ぬやかき彩れ
はよしよかきぎゝれて。たゝやこかとけすたとゝ。中天ふ
きさ〜あちとえゆもやて西よなるすれとゝめかさきや。
うき雲れさゝめ彩くてきの人をさゝえ。けこれたろつる
そのきそはゝて。先おんおほめ。さゝあさちう森よやとれも。
ふせゝもおけえた。海糸の波ようゝひてを。底きをきゝれ
さゝいたゝきみ〜かき。おのゝ〜れすみすれきゝくゝう
はきて。ガのやするゝ人きゝひよよを〜はしきもあれかて。
又れち波つせのゝ〜ゝむいきれるあよ。人はさとすせと。
四海の水れゝきすよやとりてもさゝゝみきよのきゝ〜さを

れゝいさゝいせすゝこゝひはよきゝふすかゝて。えをつゝみ。
波をかくすゝいつゝん。さかゝ人のゝろれゝさ〜。ゝきれ
ぬ〜ゝ。又ゝをけすゝもうはかきを彩ゝともさゝあ〜ぬ。
えきすゝ波のさゝもゝ。たゝこの光をみのきてゝえ。照すゝ彩れ。
かれいゝ。ゝさつゝよつすせのかゝてゝをかきよ。老とかるまの
とのゝうちかゝうめんそいとも〜ゝあきゝ〜や。

大ゝるゝんてやいすゝこ月の月ちゝよゝんを彩めゝよをかい
月ふれあゝれ。ゝこれをゝゝとわるゝと案

花をゝきゝゝ。月をあゝれむなゝは〜ゝるゝ。かゝれてのせ
きゝさゝ彩ゝる。ゝみなゝあを考ゝるゝ。ゝゝもゝ上つ代ゝすて
おゝゝよきゝる。ふゝゝんをゝくゝさめゝやゝそ。ゝつゝさゝくゝの文よ

はしまつ月をうの事よかき給へる。紀貫の家よりかへ
へる。きのあつて後。後京極の後世よいとうて。新人
おぼくいて来てかどうふみやひをかそ。うゑくよりうひを
みする事。望月をもてんの種とたゝきるかくて
そのうはるよきてとうひて。世すはいよ〳〵さまふかなもて
ゆきて。あるハ地獄もひかきまを。絵よりはくはる光を
月よりおまよ。あるいさすしもおろうゑるもたるもかきふま
をれをつるきる人なきやみよ月をとうあるいそのいろ
ちぶ神よいのる。月ハゆく〳〵と仏よりきはるはと思ものし
あがるたきまるる山うつ。ふせきちやのきつのめまても。
月と花とよんをとせをる形あるうけ〳〵しきまを

かきまうくもかしこきおはみあをひれきはうとゑるまー
つる。月とおそのるあるたはけてうをうをけの
もし波をようきを行ふ事。おきてなるよるのとゑる法を
のるめしまを人なうまうかくさはくおるよるのあとを
をるるよいよ一も今もうる花をみ一かきる。月と花とをうむ
かしこおもくる事。ひとをしてつれをあれをとし、
いつれをるをしてを。一をるをもろををる人をれすい
あるをきうるを人をあるをてをを一をとつをいん。
人をを人をもなうぬ一しきうハあれとおををとやまるを
ゆをあるそのおとうはきをうハをきるをかれよハあるをめんと。
好のうしうちをる人の光ををを人ををををいををるを

いとをかしう。そもく花ゐまよあかつき。きさらぎ
ようよう。月も秋よあかつき。かすみもおぼろなる。今おの
くち義ゐんとりていとう。かすてる老ゐるれをつぼめる
ゐれ。さうさうちいてんなのしうもかく。ふいやー半れを花く
しきせをへて。味よかをんねるいもか半れ。く鏡ようち
むうをうしもかしこの書をて。月の新をれるうき。
かるふくようをおもひて。へうされ月をおようへつ金れ。
うれを。花ようれのつまようとく。月をてんのひうれきる。
きいへ。おをまるひようのまたかうおぼをて人のう後
ようを。いをてうまるもいてを。

琴後集巻十五

墓碑祭文

足水義墓碑

義。氏を行山。名を誠之。字を道とつひ。ずく老ようを
ようへを。伊勢國壹志郡。菅瀬里の人なり。其父何のうの時
ようを。江戸の大坂のをくをまをて。よ後つの交易をを
もて。業とせり。事足をを。ゆををををを。義の家をはよ
てを。あれうちよ富を形るんもをくて。すへて商人のをんを
れをひとを海をてせを。後を里よがうを形るすをかを
ゆて。大うをの世乃ようをいとんひて。ちつをき定よ獨を
んををやう老るを。を老よ好める事を。を秋の木を氏をれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

まて。とし月あひすみつゝとゞつひまをうばさりつゝ。標照いとを
かすかにまつ。その老たれまろはゝとまこと。後初のゑはまた
みもたやのうゑよりもむ考る事なく。人と行かてをいよ
父母れこゝろをなくさむるつきのこんをはくせり。かゝれ
そ祝をうやまよ。まあ形るんれまとをゆて。人よおまして
をゝはう。かゝやかゝるもすんてむつまし。家のもゝ後を
よせて。後ひなひうさるこかうつき。をちかをゆきいとは
あるときい。ゆよむ事をこのみて。ゆまれゆをは
を。おのれよ四あり。又梅屋のむう坊ゆるつをたひ
て。いつをくみ雲かうをて。んやりくををなを考ほを大
かゝれをの。ゝゆうゆきなはをいとんでおまふ人

多かゝ。俊源信瑞ら。ゆをりみゝりけをゆをんをかをゝふ
をゝ。ゆれんを考ゝを。ゝ城をとゝし寛政のゝれをゆむ月のよ清
よゝをゝちゆよかをゝをゝるゝしゝつひゝあつゝしゝかゝりもて
切てをゆををつゝあゝ一はゝ。みゝゝりゝをゝよはゝを
ゝ清ゝう。二十あゝゝりみゝをゝの表状をかんへゝをゝあゝれ
かをゝきかゝ。かゝゝ人のをよゝおゝうゝをゝしゝ事よゝをゝく
父母れんのやゝをゝれゝをゝりゝのおゝはゝをて人ゝゝ。かゝと
きゝく人。かをゝゝをゝゝゝ

友なりきしを。をくりつるも。みぞれとなりぬ。いかむ。き業なと、
ねを。はるとなき芽をもつすれて。かきつくるよあんるきる。
わくひふよををつすれめや月雨よかくのこれとをくちけそぬとも

寛政のこれをさはき

祭芳宜園大人墓文

ちくよ文化のとをを九月八日。平素清。謹て芳宜園の大人乃
墓につきれみまよ。業の初不一枝をさむを。香ぬ本一ひらを
嬢てうるのつををまうさ。あをれかなーきかも。君をわ
きよ十さいひて一とをのられるみよおをんなるのいよをの
かをを。うへ心はるよ。君いおはるきかうの齢ひよれをして。我を
まるつくいうををはう業る。君をる縣君の庭よ拾ず外をよ

ゆきうひるる時。あーたよををををて。君れみをーのきりへ
ま定を。ゆ上へまはうををて。君のち祝乃ををよををりて。お
うをはーきまつれる事。祝をはをかをるもおすのををるん。
書をむをて。君を師をもををみ。をつをををて。をしを
筆ひのつをををを一ををひ来る中はすーて。君を法のへの
道よいをるくおをー。をしををををつをひて。おの川
かをうをををすををもる色はるを。君法をを君ををきをなをひて
後ををれも初形ーちををををををををををををををををををををを
をれ道ーる人を形ー。月を初めををて。君の母をあひ乃
をを。うき事をもををれへ。をれへを初ーを。ををををををを
ひて。ををあををるわをれ。ををををををををををををををを

なく。人をかなしがる事。今よりほどとせを。初めをくかへし
かそへつれども。あひ変らぬ事。すでに五十とせにあまりぬる。
さるを今おくれてまたかりていつの世にかあひぬらん。いつれの
時にかまたこゝにはん。常なきいにしへの人のまねびをしたるに
をいうてるおぼつかなし。かゝるをりにかいよくたへぬ。あはれ
かなしきかな。文の林よりとりて人言の知れる日をこゝ
ろゆきるべし。賀茂の義をよおて。今どすでにいすゝにかへる。
さて雲れぬるきんゝにあきつきるのあやなるみやび
こゝろふかくいにしへをとゝくひせを学ぶ。毋きこゝつくるも
かゝくのれよなつこゝろひとれてあやしこゝろむるこゝひ
見おろくたまあひてよくうきゝ人なんまれかるしを。

見ぬとりんをおくしてあまりよくさし。庶くいさかりより
ちうき人をまのあるもおうらはなんとはき人をけるかゝ
なひおりていすゝにうちの宗せを盛りかるるい。諸ホ
見れちうれよりてかるそれこつうよみを殆へるうをを
人こゝろるきこゝへ。しきかゝとかくをれいう
さるを彩。そのいゝをうはせるハ。茂系宇楽乃侍せま
れるひ。後のたくみよかゝへるハ。堀河を取の侍ひこゝを。
人よおもふ事いにより侍くさる事おく。やまるるあハ河ま
れぜさる事かんあるさりけるられをそてるきもみしか
きも。笑てたゝとなさる人かゝ。又ことのこれ人ハその名を
見ぬこゝれていハ。方のおゆて杉ゝとおもひて。そまぼこて。

君は一うさをいてゝあるひかきたるゝゝもかゝしとらひて
ゝ。ふゝくよう侍らい者。きゝを今。さうよれあるゝもゝもち
やうて。むの幻き。ゝゝひゝえを分めるいつゝもちれおき
きのゝうは。大かゝの世人のられひともいゝつ面。さ秋を
いうてゝをしゝたちゝんかゝゝゝれういきゝてゝきゝんあゝれ
かゝしきかも。ひのかゝくことあをすゝと。泉れきゝすゝもさやの
ゝれてゝしゝ。天うゝけゝてゝもほゝゝふみゝれはせゝかゝん
ゝゝ以。

書肆

京都三條通列屋町　出雲寺文治郎
大坂心齋橋南二丁目　敦賀屋九兵衛
江戸日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛
同本石町十軒店　英　大助
同中橋廣小路　西宮彌兵衛
同芝神明前　岡田屋嘉七